KH397-J83 9層金網
1200901109550

詩集

百城を落す

中勘助著

百城を落す

著　助勘中

詩歌集 琅玕	新菊判	二・〇六	六〇
詩集 機の音	新菊判	二・五〇	一〇
詩集 海にうかぶん	新菊判	二・五〇	一〇
詩集 吾往かん	新菊判	二・五〇	一〇
大戰の詩	四六判	〇・六〇	四〇

百城を落す

KH397
J83

太湖

太湖をわたつて　南京を衝かんとし
賊船を頤使して　暗夜に走す
太湖茫茫　飛雨濛濛
星辰影なく　舷燈また滅す
干戈をとつて　大陸に馳驅し
半歳にして　百城を落す

河北を平げ
滿船の將士

江南に勝ち
意氣南京を呑む

昭和一二、一二、二一

南　京

古城夜深し
星斗しづかにめぐる
壘壁八十里
十萬の貔貅守る
勸降明日を期とし
巨砲口をならべて待つ

遮莫蔣將軍
骰子を投ずるや否や
天悠悠地悠悠
大江東西に流る
永劫流轉の道
興亡一刹那

昭和一二、一二、某日

黄　河

黄河一千里
はるかにチベットを出で
甘粛を過ぎ
蒙古を過ぎ
陝西を界し
山西を界し

中原を横ぎつて
大海にいる
甘露のごとく
仙藥のごとく
漢族を潤ほし
漢族を榮えしむ」
黄河一千里
はるかに西藏を出で
洮河をあはせ

通河をあはせ
汾水をさそひ
渭水をさそひ
中原を横ぎつて
大海にいる
洪水天に漲り
山野に溢れ
漢族を苦しめ
漢族の憂ひとなる」

黄河四千年
百國ここに興り
百王ここに亡ぶ
鯨波市城を搖かし
枯骨平原を白む
秦漢隋唐こもごも隆替す」
黄河四千年
滔滔として星辰を流す
英雄ここに馬を驅り

夷狄ここに戈をふるひ
壯士ここに悲歌し
佳人ここに涙をそそぐ
四千年また四千年
滔滔としてつくるときなし」

昭和一三、四、三

挌闘

頑張る敵に
機銃がこはれて
泥濘の塹壕
塹壕のうへで
敵は四人
とびかかる奴を

未明の夜襲
ピストルをもつてゆく
また塹壕
ばつたり敵
こちらはひとり
二人うち殺し

三人めをうつたが
むかう面をなぐりつけて
泥ぼつけの挌闘
上になり
上になり
へとへとになつて
大きな手が
そこへ通りかかる
「日本人はどつちだ」

たまが出ない
四人めに組みつく
必死のつかみあひ
下になり
下になり
組みしかれた
喉をしめる
味方のひとり

「下だ」
「よーし」
グサリ
突いたなり　　駈けていつた
魂ぎる敵を　　はねかへして
あとを追つて　　駈けてゆく
味方は誰か　　たうとうわからない
おほかた戰死したのだらう

昭和一三、八、三

江北

飢ゑ、疲れ、熱と渴きに
踏む足も土にはつかず
はてしなき江北の野を
病めるごと息づきゆけば
大戰はよもにすすめど
道絶えて知るよしもなし

逃げ去りて人なき村に
ゴケゴケとうさぎ馬なく

昭和一三、一〇、一五

提灯行列

漢口陥落こよひぞ祝ふ
行列つづくお濠ばた
二重橋から九段へかけて
よせる人波歌の波
ゆらぐ百萬ほほづき提灯
なかにや涙で火がきえる

昭和一三、一〇、某日

鉛筆

戰地の兵隊へとどいたひどく輕い慰問袋
あけてみればなんのこと鉛筆一本に手紙
たどたどしい子供の手で書きつづつた文言
私のとこは兄さん二人が出征してゐます
家が貧乏でなにもあげられません
鉛筆一本送ります

もらつた兵隊は聲をあげて泣いた
遠い遠い支那の戰場で

昭和一三、一二、三

日本刀

日本刀をさげて大陸へわたる
皇道樂土を建設のために
日本刀はきれるぞ　ズバリ　ズバリ
青刀紅槍をがらのやうに
邪魔するものはみな斬り倒せ
百萬千萬　ズバリ　ズバリ

昭和一三、一二、一七

軍馬

人びとよ　軍馬を憐め
彼らは眠らず
休まず
飢ゑ
疲れて
惡路泥濘を

戰ふ將兵のために
糧食や軍需品をはこぶ
彼らは鞭打たれ
酷使され
たまさか與へられた寢藁のうへに
骨立つた體を横へたまま
腰がぬけて死んでゆく
蕈の朽ちるやうに
草の葉の萎れるやうに

默默として死んでゆく
彼らは脂肪、グリコーゲン、葡萄糖をつかひつくし
横紋筋まで破壞してるといふ
人間の戰爭で馬が死ぬ！
人びとよ　軍馬を憐め

昭和一四、二、二〇

遺書

武漢三鎮に敗れて決河のごとく南下する支那軍
粤漢線を遮斷すべくはやてのごとく西進する快速部隊
双梁橋にてひとりの兵士
敵彈をうけてガバと倒れ
馳せ去る部隊に追ひつかんと悶えしが
かなはずとみて戰友に傳達を頼み

弱りゆく身をひとり走り書きの遺書
「右足負傷
今日武漢落つ
敗敵多し
戰友吉岡氏に聯絡たのむ
……
殘敵來らば一人でも餘計にうつてやる
やるぞ
駄目なら自殺する」

かくて終に銃口を胸にあて自殺をとげたり
粤漢線爆破
咸寧占領ののち
その悲壯なる最後は全軍につたへられ
將兵みな感涙にむせびぬ

昭和一四、二、二三

蘭州

蘭州碎くべし　　共匪の據るところ
二月二十日　　飛艦を放つ
編隊堂堂　　甘肅の天
密雲黯淡　　赤都をおほふ
一彈飛來して　　機心を貫く
我事をはりぬ　　隊長意すでに決す

「編隊を解け」
翼をふつて　　僚機に命じ
直下三千丈　　蘭州に墮つ

昭和一四、二、二三

武漢攻略

戰機熟す
皇軍武漢を攻めんとして
野火のごとくに西進し
蘭封を陷れ
開封を陷れ
中牟を陷れて

鄭州にせまる
敵軍爲すところを知らず
黄河を決して防ぐ
濁流河南の野に溢れ
民の溺るるもの幾萬
家を失ひ
糧を失ひ
號哭の聲天にきこゆ
河水南下して淮に入り

東して洪澤湖をこえ
大運河を横ぎつて海にそそぐ
滔滔數百里
「しばらく皇軍を沮む」
武漢拔かざるべからず
計策すでにさだまる
「なんぞ黄河に沮まれんや
よし大別山をこえん」
大別山波濤のごとし

蜿蜒として江北に連る
全山壘壁をめぐらし
百萬の精兵據る
なんぞ大別山をこえざらん
將士すでに死を決す」
武漢拔かざるべからず
よし大江を遡らん
大江漫漫
機雷魚鼈のごとし

兩岸の堅陣
巨砲霹靂をはなつ
なんぞ大江を遡らざらん
將士すでに死を決す」
武漢拔かざるべからず
よし江南を破らん
峻嶺峭壁をつらね
湖沼行路を遮り
赤日鐵冑を灼き

瘴癘人馬を殪す
なんぞ江南を破らざらん
將士すでに死を決す」
武漢拔かざるべからず
よし粤漢線を斷たん
裸岩凝血黑く
枯林鳥聲絶ゆ
たまを負ひ
車を負ひ

馬を負ひて登る
苦艱堪ふべからず
ひとへに君國を思ふ」
江南路遠し
いづれの日にか三鎮に到らん
一峰を取るごとに
全軍の將兵泣く

昭和一四、二、二四

固陽

陰山を北にこえて
孤軍固陽に屯す
秋風綏遠の野
荒涼としてゴビに連る」
陰山雪白し
鴻雁南に飛ぶ

千里大江のほとり
友軍の士を愁殺せん

昭和一四、三、五

傳書鳩

山嶽地帶は豪雨である
峰峰が密雲にとざされてゐる
支隊ははひつていつたなり音沙汰がない
無電が絶えてもう幾日
底なしの泥濘に沈んでしまつたやうに
狂奔する濁流に溺れてしまつたやうに

捜索の飛行機は雲に迷つて空しく歸つてくる
全滅か
心を痛める將兵のまへに
風にひるがへる朽葉のやうに落ちてきた鳩
胸にいたいたしい生疵
鷹の襲撃！
足に血染めの通信筒
「十數倍の敵に包圍され
糧食彈藥つく

死傷算なし

□□を死守しつつあり」

昭和一四、三、五

雁門關

零下四十一度
雁門關をまもる
氷を吹く北風
骨にとほる寒氣
夜陰にまぎれて
しのびよる殘敵

カラン　カラン　と鳴る
鐵條網のカンカラ
雪を掘つて彈丸をとり
滿を持してはなつ
紫電一閃
一發數十を殪す

昭和一四、三、七

山西

鐵兵長城をこえ
疾驅して山西にいる
鏖殺また鏖殺
南下して黃河にむかふ
醒風旌旗をひるがへし
流血黃土ぬかる

堯舜民を化するの地
かの共匪を拂拭せん

昭和一四、三、七

鐵橋爆破

昭和十二年五月五日
徐州の戰ひ始まる
岩仲支隊蒙城をとり
永城を襲つてこれを落す
「王集附近に於て隴海線の鐵橋を爆破せよ」
命によつて永城を發し

僞つて碭山にむかふ
敵を韓道口集に破り
遽に道を王集に轉ず
廣漠たる河南の平野
纔に磁針によつて進む
車陣轟轟
黄塵濛濛
烈日赫赫
暑熱炎炎

友軍の飛行機
飛び來つて報告筒を投下す
「針路すこしく東に偏す
黄龍によつて方向を示さん」
十四日正午回龍集に到り
一老人を捕へて王集にむかふ
突破數十里
終に隴海線に達す
戰車を橋の東西につらね

工兵隊橋上を進む
監視の兵逃げ
敵軍いまだ到らず
三時二十五分
草刈大尉雙手をあぐ
電火一閃
爆音地を震はし
敵兵五十萬
網中の魚となる

昭和一四、三、一〇

戰車ありがたう

突擊する中隊
彈丸雨飛
將棋倒しの歩兵
敵前三十メートル
倒れる中隊長
驅けよる當番兵

介抱するところを
ここぞと狙ひうつ
こちらもうちかへす
ひとりとひとり
ところへ戰車がいつて
一發でふきとばした
兵隊は手をあげて
「戰車ありがたう
戰車ありがたう」

昭和一四、三、一〇

清河鎭

濠のうしろの堅陣に據る敵
迫擊砲
重機
輕機
小銃
手榴彈の猛射

そを制壓すべく
歩兵をこえて前へ前へ
しやにむに河原を進む砲兵
「あぶない　あぶない　とまれ　とまれ」
どなる歩兵
とまらぬ砲兵
敵前五十メートル
百發百中
ダーン

ダーン
ふつとぶ敵兵
碎ける壘壁
敵彈も百發百中
人間の蜂の巣
倒れる照準手
天皇陛下萬歳
分隊長重傷
分隊長代理重傷

照準手代理重傷
發射手代理重傷
つぎつぎにやられる
殘る衞生兵が分隊長となり
發射手ともなり
補充のくるまで戰つて
つひに歩兵を突込ませた
壯烈無比な
砲兵の接戰

昭和一四、三、一一

盲目

大場鎮附近の戰鬪に
敵陣へ突入した戰車
前方の機關銃が射擊をやめ
暗がりでごそごそやつてゐる
「どうした」
「機關銃故障」

血！

「どうしたか」

「右眼をやられました」

なほしつづける

「銃手交替」

「まだ左の眼があります」

なほつた

そのまま左眼でうつ

その眼を憎むやうに

またもやたまがきてつぶしてしまつた

昭和一四、三、一一

茄子

北支那の泥濘の海に
ばたばたと落伍する駄馬
それを見すてかねて
あとに殘る特務兵
もと見ず知らずの馬と人は
なにかの縁で生死を共にする

なかに自分は飲まず食はず
ごばう劍で草を刈り
泥水をのませたりして
倒れた馬を生きかへらせ
敗兵の群るなかを
三日も遲れて隊に追ひついたひとり
「おー戻つたか」と中隊長
「どうして命をつないでゐた」
「茄子をかじつてをりました」

といつてぼろぼろ泣きだした

昭和一四、三、一九

不死身

江南戰線太田部隊で
「不死身」の名をとつた西川上等兵
無錫の市街戰で大腿にチェッコ彈
二三日入院して南京へ出かけ
光華門附近で腰部に貫通
二ヶ月後の徐州戰に下腹部へ一發

一ヶ月で退院原隊へ追ひつき
今度は瑞昌で左手へ一發
假繃帶のまま雲溪崖の夜襲
グサリと右手にダムダムの盲管
二週間でなほつて　またきたぞ　と前線
全身に十數發の彈丸をくつて
是非とも漢口へといふ豪勢な話

昭和一四、三、二三

鶴嘴

昭和十三年二月四日
ふりつむ雪の光華門
凍える手をぬくめながら
鶴嘴ふるふ四十人
去年十二月十日のいくさ
南京城の一番のりに

花とちつた勇士のうち
五人の遺骸見あたらず
それをさがしに駐屯地から
はるばるここに昨夜着
けさ起きぬけに心あたり
掘りかへす戰友のまごころ
通じたやうにかちりとあたる
たまのぬけた鐵兜
血にまみれた戰鬪帽

五錢玉の千人針
かはりはてた姿のぬしに
涙ながらの默禱や
ふる里とほき支那の國
南京城の城門に
空かきくらし心なく
雪はいよいよふりしきる

昭和一四、三、二四

ばはん船

稲麻竹葦の敵追ひかけて
進む五百の舟いかだ
エイヤ　ホイヤ
エイヤ　ホイヤ
左舷右舷の敵なぎ倒し
夜をこめわたる澱山湖

エイヤ　ホイヤ
エイヤ　ホイヤ
勇むかこ衆は南海そだち
腕におぼえの金剛艫
エイヤ　ホイヤ
エイヤ　ホイヤ
きそふ舳先に日の丸たてて
これぞ今様八幡船
エイヤ　ホイヤ

エイヤ　ホイヤ

昭和一四、三、二五

わらぢ

三人の兵隊にひとつわたつた
はじめての慰問袋
びつくり箱をあけるやうに
こはごは口をとけば
目のまへにころげ出た
一足のわらぢと手紙

「……靴は豆ができます
ぢかたびは水蟲になります
もしやと思つてわらぢをおいれしておきました
いま母といつしよにつくつたばかりのところです」
海のかなた
はるかな日本
藁をたたく娘
わらぢをなふ老婆
三人に一足の

はきやうもないわらぢ
故郷の藁の
身にしみるかをり

昭和一四、三、二八

り す

大別山はてなし
百里鬼火をつらぬ

廣濟まぢかの激戰に
痛手をおうたひとりの兵
砂原にうち倒れて

きえゆく魂のみる幻
「お母さん　栗鼠がゐるよ　お母さん」
ほんにこのへんの木には
たくさん栗鼠がゐる
「山口お母さんの手紙だよ」
戰友は血まみれのかくしをさぐつて
瀕死の友に讀んでやる
「……いま畑には茄子がいつぱい出來てゐますよ
茄子はちぎつて町へ出しませう……

お前様が歸る日は
この茄子にまた花がつくころか
實がなるころか……」
「お母さん栗鼠がゐるよ」
さういつて息が絶えた

大別山無情
峩峩として烈日に灼く

昭和一四、三、二八

戰車兵

南京へ　南京へ
轟轟と突進する戰車の列
周圍の丘陵からうち出す巨砲
彈丸にうちぬかれて燃えあがる戰車
戰車から飛び出して萬歳を叫びながら
兩手をあげて生きながら燃える兵隊

敵都をまへに生きながら灰になつてゆく

昭和一四、三、二九

夜襲

舒城陥落の無電
桐城へ急追の命令
敵は安慶より五萬の増援を得たりとの情報
彈雨のなかを魚の骨のやうに破壊されし道を進めば
日はしんしんと大別山に落ちゆく
「今夜は充分に食事をするやう

脚絆をまきなほし靴紐の切れぬやう
重い物はなるべく捨てるやう……」
ほのかにかかる十日月
あすを思ふ者はなし
ややあつて
「銃剣に泥をぬれ！」
午後九時夜襲開始
戰友の屍をあとに
這うて近づく山の裾

部隊長のあぐる手に
一度にどつと驅けのぼる
亂闘
死闘
斬殺
刺殺
刺殺
血に洗はれし銃剣に
ひとつの山はとりたれど

四方の山よりあびせる彈丸
山はみるみる火焔の山
頭上には縱横無盡に
口笛ふきつつ飛びかふ死魔
逆襲の敵の軍勢
まつ黑に攻めのぼる」
夜はあけぬ
きその日はけふ照せども
生きて見る人いくたりぞ

血の傳令はゆきかへど
今は一發のたまもなし
岩角にひれ伏して
最後の時をぞまちゐたる

昭和一四、三、二九

新南群島

南支那海颱風の島
今ぞ飜る旭日の旗
フィリッピン　ボルネオ　インドチャイナ
マレイ　スマトラ　星羅碁布す
南支那海風雲を孕む
大鵬しばらくやすむ圖南の翼

昭和一四、四、一九

遺族

胸に遺族の徽章をつけて
道をたづねる爺さん婆さん
澁紙色に日やけした顔
ふしくれだつた皺くちやの手
鼻にかかつた奥州なまり
招魂社まゐりのお百姓さうな

わたしやあの鳥居をみるたんびに
涙がこぼれてなりませんよ
お爺さんや　お婆さんや
今度のいくさであなたがたも
息子さんなくしなすつたかね

昭和一四、四、二七

湖北

漢水の東
大別山の西
二十九個師を包圍して
悉く退路を斷つ
敵軍爲すところをしらず
周章し

狼狽し
彷徨し
遁逃す
我軍勝ちに乗じ
戰車を驅り
鐵騎を放ち
敗走を追つて
これを鏖にす
壯なるかな「四月攻勢」

狂瀾を既倒に廻さんとす
李・湯將軍いづこぞや
湖北の山野鬼哭にみつ

昭和一四、五、一二

白　鹽

支那の内地は鹽の飢饉である
あるところでは十俵の米が一俵の鹽にかへられ
あるところでは年寄の病氣が一杯の鹽湯でなほつた
ぼろぼろな子供たちが大きな野菜の束をかかへて
日本兵のとこへ鹽を貰ひにくる

「白鹽」

さういつてひとつかみの鹽とかへてゆく
廣漠たる沃野のなかで
戰禍に瘦せる不幸な支那の人びとよ

昭和一四、五、二一

荒鷲

昨日雲南を襲ひ
今日蒙古を攻む
城を碎き
壘を碎き
陣を碎き
兵を碎く

扶搖にのつて萬嶽をこえ
生死を浮雲に託す
飛翔十萬里
震撼四百州

昭和一四、六、一

西住中尉

西住中尉は九州男兒
二十五歳の若武者
寶山城の初陣に
夜どほし戰つたあけの朝
寐不足の目で兵隊と
軌道の泥をとりながら

「支那兵は弱いですな」と
ぽつつり人に答へた中尉」
大場鎭の戰ひに
蘇州河まで出た戰車
避難の外人を狙擊する
支那兵を見つけだし
「この野郎」
軍刀ピストル左右の手に
戰車から飛び出した中尉」

張家樓宅の西北
無名部落の戰ひに
敵陣まぢかくのりだして
銃砲をうちこめば
百發百中
ふき飛ぶ堅壘
家を倒し
陣地をこえ
戰車を交通壕に跨がせて

逃げる敵をつるべうち
逆襲部隊に突いて入り
ばつたのやうに飛びつく敵を
振り落し　振り落し
屍の山をきづいた中尉」
大場鎮の落ちた翌日
道にたてこむ砲車輜重
そこへ來あはす戰車の列
先頭に跨つた中尉

破鐘聲で怒鳴る
「南翔へ突撃するのだ　どけ！」
道をあける隊をあとに
土風のやうにかけり去る」
南翔の戰ひに
戰車中隊を率ゐた中尉
苦戰の味方を援けんと
闇のなかを驅けまはれば
敵彈集中

飛びちる火花
さながら地獄の火の車
そのうち前照燈をうちぬかれ
正面にあいた大孔
雨霰と飛びこむ彈丸
射手照準手を左右によせ
自分は天蓋にぶらさがり
兩足をふみひろげて
「蹂躙　蹂躙」」

いつしかはぐれた山根小隊をさがしに
夜の戰場へとびおりて
豪雨と彈丸と叫喚のなかを
聲をかぎりに呼びまはり
二時間後おちあふや
小隊長の手をとつて
「よかつた　よかつた」と泣きあつた中尉」
顔や手足に負傷して
板きれの下駄をはき

手製の松葉杖をついて
野戰病院に部下をみまひ
一日枕べで慰めた中尉」
宿縣南方噲河に近く
渡河點偵察の輕裝甲車
敵陣へ躍りこみ
縱横無盡に荒れまはる
それでも足らず飛び出して
逃げる敵をうち殺し

退く敵をしり目にかけ
露出地をどんどんゆく
「西住あぶない　どこへいく」
いはれて中尉はにつこりと
「射ちがらぬきを落しましたからさがしてきます」
的になるのを知らぬ顔に」
間もなく部隊を誘導して
縣城突入となつたときは
乗りこんだのをまた出だして

戰車のうへで踊りをつた」
李大庄附近の戰ひに
目と鼻の敵前クリーク
渡渉地點を見つけるために
戰車をおりてただひとり
あちこち土手を驅けまはり
砲煙彈雨のたそがれを
隊長の車を追ふ姿
とみるやばつたり倒れ伏す

部下は走せよりかきあぐれば
大腿部貫通
大動脈切斷
ふき出す血
かけよる隊長
「大丈夫です　中隊は左から攻撃しなければなりません」」
死にゆく勇士をのせて
荒野の夜を後退する
看護の高松上等兵に

「おまへらと一年で別れるとは思はなかつた
日ごろ教へた軍人精神を磨け
部隊長によく仕へてくれ」
「部隊長殿に　お先に失禮します
しつかりやつてください　と傳へてくれ
お母さんにいうてくれ
小次郎は滿足してまゐります
これからおひとりでお淋しいことと思ひます
永いあひだ可愛がつていただきました

姉さんお世話になりました
弟――」
「天皇陛下萬歲」」
突撃三十四負傷五度
頭、顔、背、胸、腕と足
つひぞ戰場を去ることなく
鐵牛彈痕千百餘
見るもゆゆしい滿身創痍
西住中尉は九州男兒

二十五歲の若武者
戰車隊の花形
忠烈鬼神を泣かしめる」

昭和一四、某月、某日

昭和十四年九月五日印刷
昭和十四年九月九日第一刷發行

百城を落す

定價七拾錢

著者　中勘助

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行兼印刷者　岩波茂雄

精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二ノ三　岩波書店
電話九段〇一八七番
振替東京二六二四〇番

中勘助著

銀の匙　三四六頁　二・三〇

銀の匙　岩波文庫　一四六頁　〇・四〇

犬の附島守　一四六頁　一判　一・二〇

沼のほとり　二四六頁　〇判　一・四〇

街道樹　三四六頁　八判　二・〇〇

提婆達多　三四六頁　〇判　一・八〇

菩提樹の陰　三四六頁　六判　二・〇〇

母の死　三四六頁　四判　一・八〇

しづかな流　五四〇頁　〇判　二・二〇

9圖全雜

¥ .70